

## 対談シリーズ11 第96回日本泌尿器科学会総会

西 村 泰 司

日本医科大学教授・第96回日本泌尿器科学会会長

小 川 修

京都大学教授・泌尿器科紀要編集委員長

小川：今日は第96回日本泌尿器科学会会長、西村泰司先生をお招きして、今回の学術総会や先生の日頃のお考えに関してお話を聞きたいと思います。

まず、本学会ではテーマを設定されておられませんが、その理由からお聞きしたいと思います。

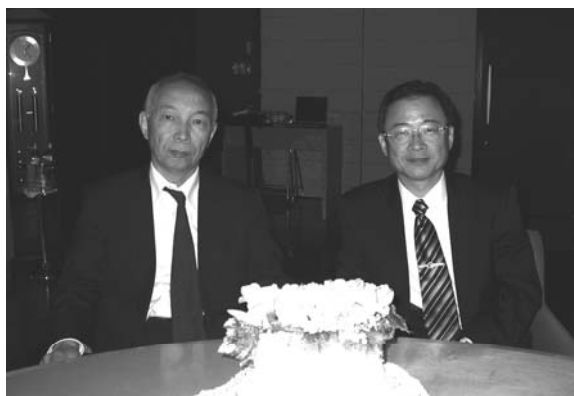
西村：今までの総会では、会長さんのお考えやご見識でいろいろなテーマを作ってこられましたが、結局、学会の内容自体は座長の先生のご尽力と演者の発表そのもので決まるように思っていました。あえてテーマをこじつけるのではなく、ひとつひとつの発表に大会の成否を託すという意味でテーマは設けませんでした。

小川：パンフレットを読ませていただいたのですが、シンポジウムなどの題の下に「うり」というのが書いてあります。内容重視でわかりやすいたいへん良いアイデアです。テーマに関してもそうですが、形式にこだわらない開放的な先生のご教室の雰囲気が良く出ているように思います。

西村：総会に参加していただける先生方に、そのセッションで何を聞いていただけるかすぐわかるように考えています。項目の先頭にある顔のマークに気がついていただけましたか。私の知人の美術大学の方に書いていただいたのですが、ふうてんの寅さんの似顔絵や私を含めた教室員の似顔絵になっています。

小川：本総会の企画の中で、是非先生が参加してほしい、聞いてほしいというものがありませんでしたら教えてください。

西村：ひとつは「緩和ケア」です。私は癌の緩和ケアは診断時に始まっていると思っています。終末期に近づいてから緩和ケアを考えるのはすでに手遅れで、そ



のあたりの感性を教室員を含め皆さんに受け止めていただきたい。北海道大学の篠原先生と静岡がんセンターの薦巢先生にお願いして、本音で議論出来セッションにしていきたいと思いますと思っています。

もう1つは「バーチャルリアリティの医師教育への応用」です。数年前になりますが、私自身 TUR の教育ということで米国に取材にいったことがあります。あれから数年経過していますし、それが本当に医師教育に役立つレベルにまで到達しているのか、その実態を見てみたいと思っています。

さらには「女性泌尿器科医」に関してのセッションです。本総会ではいつにも増して女性の晴れ舞台を多く用意いたしました。

小川：「女性医師による育児の実態と今後社会に求める具体案」というシンポジウムなどは泌尿器科学会総会としては斬新な企画ですね。

西村：これは、眼科医の若草まや先生や、女性医師の社会的貢献と地位向上の支援を目指した NPO イー



ジェイネット代表の瀧野敏子先生を交え、他に泌尿器科医女性2名、男性1名の討論です。若草まや先生は、5、6歳の娘さんをスイスの寮制インターナショナルスクールへ留学させておられ、現在外国の名門校への留学をめざす小学生の準備校となるバイリンガル寮制小学校を日本国内につくる構想をすすめておられます(ニューズウィーク日本語版2007年9月12日号p43~44)。本総会において目新しい討論になるのではと期待している次第です。

もうひとつの斬新な企画があります。先程述べましたように、本学会ではテーマを設けておりませんが、演題募集要項の表紙に「曙富士」を用い、裏表紙に「がんばれ、にっぽん！」と記しました。気持的には「貧弱な政治じゃあないんだから、日本泌尿器科学会世界に向かって頑張れ！」です。そこで、UCSFの篠原克人先生に「世界に強い泌尿器科医になるには」をご講演頂く予定です。

小川：最近泌尿器科学会が会長に協力しながら総会のプログラムを決めるというような形になりつつあると聞いていますが、実際に先生が会長をされて気のついた点はありますか。

西村：もうすこし経費などに関してサポートがあっても良いのではと思っています。企画の中にはAUA-EAUとのジョイントのようないわゆる学会の対外活動的なものも依頼されています。教育プログラムに関する時間的空間的スペースもいろいろ工夫しながら運営しています。ですから、そのあたりを配慮していただきたいと思います。やはり運営費に関する問題が会長の大きな心配事であることには変わりはありません。

小川：経費が心配事とのことですが、今回の総会是非常に参加費が安いのが売りともお伺いしましたが、そのあたりの工夫をお話いただけませんか。

西村：まず外国からの招請演者の先生方の数を極力抑えました。ほとんどの会員の先生方のことを考えると、わかりにくい英語で講演、しかも総論の部分が多く、あまり意義があるとは思えない気がします。今は、多くの情報がインターネットなどで直接手に入る時代でしょう。参加費をあげてまで外国人講師に費用をかける理由もあまりないと思っています。

また、会場もパシフィコ横浜として日程も3日になると、東京フォーラムで開催する場合と比較するとかなり経費節減になるんです。それと会長招宴も今回は企画しておりませんし、全国に配るようなポスターも作らないことにしています。そのほか学術集会の運営の妨げにならない部分でいくつか工夫しています。

小川：1万円というのは最近では破格の参加費です。大学院生や若手の修練医は喜ぶのではないのでしょうか。それと会員懇親会で「一人2分のスピーチはどなたでもOK」と書いてありましたが、これは本当ですか。

西村：本当なんですけど、積極的に発言してくれる会員が誰もいないのではとの心配も多少あります。音楽と普通の食事とアルコールは用意しますので、来賓の方のご挨拶はほどほどに切り上げていただいて、会員の皆さんがリラックスして心から楽しんでもらえるような懇親会になれば良いと思っています。ですから、是非、出てきてスピーチをして下さい。

小川：さきほど、パンフレットの最後に「がんばれ、にっぽん！」と書かれているとお話をお聞きしました。ある意味、これが先生の唯一のメッセージだとも思うのですが、その意味をもう一度お話いただけますか。

西村：最近日本の政治や経済が弱体化して、日本人が自信や気概を失ってしまっているように思えます。泌尿器科医もそうです。自分たちの良いところを認識し、良い仕事をすれば、ぺこぺこしなくても向こうから来るんです。私の父親は米国スタンフォードの近くで生まれています。私もクリスマスは大好きですし、ある意味では米国ファンなんです。でも、今の米国の姿には疑問を覚える時があります。それもあって、「がんばれ、にっぽん！」と叫びたいわけです。

小川：日本には日本の伝統や文化があります。合理主義や理論だけでは日本人に合わないものもあるように思います。私はニュージーランドに留学していましたが、ニュージーランドではアメリカ的なところも取り入れてというような姿勢もあるんですけれども、イギリス型の昔のいい伝統を必ず残しているように思えました。米国の経済が良いから、科学が強いからという理由で、すべてを無条件に受け入れようなどとはまったく思っていないのです。日本ももう少し自分達の文化とか伝統のようなものを大切に、海外のシステムのいいところだけを取り入れて賢く変わっていったほしいと思っています。

西村：米国は世界に向けて良いこともしていますが、一方で大国のエゴイズムも明らかです。例えば泌尿器科の分野でも、米国はドイツなど他国の論文を無視し、まるで自分達が最初に発表したように振舞います。日本の研究者にも、米国が定義を変えればほとんど盲目的にそれが正しいと従うようなところがあります。また泌尿器科疾患の治療法の変遷に見て取れるように、過度に市場原理に迎合しているところも気になります。英語は必要だと思いますが米国流にあまり振り回されることは良いこととは思えません。ですから「がんばれ、にっぽん！」なのです。

小川：今日は先生の忌憚のないお話をお聞かせいただき本当にありがとうございました。今日お話いただいた先生のお気持ちが会員に伝わり、特に若手の泌尿器科医の元気の出るような総会になることを期待しております。本日はどうもありがとうございました。